

私の父

山形県長井市立長井南中学校

三年 片 倉 優凜乃

中学一年生の県大会で、私がピッチャーを務めた時の写真。バッターボックスに立つ私。そして、スボ少の仲間と並んでジャンプしている写真。

撮影したのは、カメラが趣味の私の父です。

けれどもその父は、「パパ」と呼びかけても、もう応えてくれません。父は平成三十年十月五日、心臓疾患で帰らぬ人となりました。

私にとって父との思い出は、何よりもソフトボールです。

私がソフトボールと出会ったのは小学一年生の時です。姉が入団していたこともあり、強引に父に入団させられたのでした。当時は、ソフトボールに関心があるわけでも無く、練習に連れて行かれてもグラウンドの遊具で遊んでいましたが、練習をしていくうちに私も少しずつソフトボールが好きになっていきました。

経験者でもない父は、私をバックアップするため、本を読み、プレーヤーや審判の動きを見て独学でルールを覚えてくれました。

仕事で忙しい中、遠征や大会に駆けつけて私や仲間の写真を撮り、ビデオを作ってくれました。カメラ片手に、身長の高い父は、応援席の中でも、すぐ

に見つけることができました。

その父が、昨年一月、家族旅行先で体調を崩しました。いったん帰宅しましたが、その後検査入院、手術となりました。父は「六月には退院する。七月までには職場に復帰する。その前に地区大会の応援に行かなくては、俺も頑張るから、お前も頑張れよ。」と言っていました。手術の後も、声が出せない中、口の形で「勉強は？ 部活は？ 退院したら、旅行に行こう。」と笑顔で接してくれました。それなのに、父は一度も退院せず、亡くなりました。

私の心は、穴があいたようになっていました。亡くなつて間もない頃、いつも夢の中に父が現れ、私に返事をしてくれました。でも、目が覚めればもう返事はありません。

県選抜メンバーとして全国大会に出場したこと、高校入試や将来のこと、父に話したいことや教わりたいことがたくさんありました。友達のお父さんの話を聞くと、うらやましくて、寂しくてたまりませんでした。

もう一度だけ会つて、一言でもいいから声が聴きたい。父とキャッチボールがしたい。家族で旅行に行きたい。今でも思います。

しかし、崩れそうになる私の心を支えたのは、何よりも入院中の父の、家族を気遣う、あのやさしさと強さでした。

力を落としている母や祖母を心配させたくない、そんな私の思いは、父の思いでもありました。父のあの笑顔が、私を支え続けてくれました。

そして、私の心に残る父とのたくさんの思い出が、今も私を少しずつ前向きにしてくれているのです。

父は、へたくそなのに、私とキャッチボールをしてくれました。

また、何も言わないうちに、

「そろそろ壊れそうだったから。」

とスパイクやバットを準備してくれました。

私の心の中にはいつも父がいる。そう思うことで、私は強くなれます。

父の撮ってくれたこの写真を見るたびに、父は私を、こんなふうに見てくれていたのだなと思います。真剣にボールを投げる姿や、笑いながら仲間とジャンプする姿。

いつも応援してくれた父に安心してもらえるように、カメラ越しの、父の瞳の中の私そのままに、一生懸命、そして笑顔で生きていきたいと思えます。